

氏名	陳 淑 莊
学位の種類	博士（芸術文化学）
学位記番号	甲博文第17号
学位授与の日付	平成29年3月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当（課程博士）
学位論文題目	治療的媒体としての夢幻能
論文審査委員	主査 教授 出口 逸平 副査 教授 団野 恵美子 副査 教授 勝田 安彦

### 内容の要旨

夢幻能は舞台芸術としてどのような治療的機能を果たしうるか。本論文は謡曲を心理療法の観点から分析することによって、その可能性を探ろうとしたものである。

まず序章「芸術の機能」では、人間や社会に対し芸術が果たす機能の一つに、芸術作品が治療的媒体として人々の精神に良い影響を与え得るということ、オスカー・ワイルドの「芸術無用論」と対比させる形で提起する。

第一章「能舞台と謡曲」では、能の象徴的表現について考察する。掛詞や縁語など多義的、暗示的表現を駆使した謡曲は、観客の「不信の自発的停止」（コールリッジ）によって、すなわち観客が自発的に能の非現実的世界像を受け入れ観劇することによって、象徴的演劇としての独自性を確立した。能は「夢幻能」と「現在能」の二つに分けられるが、「現在能」では現実を再現するように劇が進行するのに対し、「夢幻能」では登場人物が見ている夢を観客に見せるというかたちをとる。ワキが見ている夢を観客に見せるという「夢幻能」の特異な演劇的構造を、論者は莊子の「胡蝶の夢」やフロ

イトの『夢判断』を参考に分析している。

第二章「三番目物（鬘物）の謡曲研究」では『井筒』を例に、まず原拠の『伊勢物語』と本曲とを比較しながら、シテである紀の有常の娘が「苦悩する亡霊」であることを浮き彫りにする。そしてワキの「口数の少ない旅僧」がただの傍観者ではなく、実は質問によって周到に相手の情報収集をおこない、さらにシテとの間に信頼関係を築くという重要な役割を果たしていることを具体的に示した。その上で『井筒』に見られる典型的な夢幻能の構造が、じつはクライアントとサイコセラピストの間で行われる心理療法の過程ときわめて類似することを指摘する。

第三章「謡曲の比較研究」では『葵上』と『野宮』を取り上げ、比較研究を試みた。いずれも『源氏物語』の六条御息所がシテとして登場するが、この二つの謡曲は劇的構造や主題、さらにワキとシテの関係のありかたにかなりの違いが見られる。亡霊となっても苦悩し続ける女性のシテの苦しみを、ワキの旅僧が丁寧に聞き取り、シテ自ら語ることによって心理的圧迫を減らし、苦悩する精神を解放へ導く。こうした展開は両者に共通するものの、『葵上』はシャーマニズムの要素が強く、ピラミッド型劇的構造（フライターク）に合致するドラマティックな形で、霊魂の世界を表現している。それに対し、『野宮』は仏教的要素が強く、内面的精神世界の苦悩を静かに表現することによって、観客の深層意識に訴えかけている。

第四章「二番目物（修羅物）の謡曲研究」では男性のシテを取り上げ、まず『八島』を例に、修羅道に堕ち亡霊となっても、武人としての名誉を受けることができずに苦しむ源義経の内面の葛藤が、旅僧によって徐々に鎮められていく過程が描かれているとした。ついで『実盛』を取り上げ、これが亡霊である斎藤実盛の懺悔の物語であり、ワキの他阿彌上人がシテの懺悔に重要な役割を果たしていることを示した。

第五章「治療的媒体としての夢幻能」では、あらためて夢幻能の構造と心理療法との間の類似性を確認し、シテとワキの関係がクライアントとサイコセラピストに相当する点を強調した。その上で芸術に治療的媒体としての機能があることを、フロイトの「精神病理学的な演劇」という観点から考察している。さらに心理療法の視点から見れば

ば、観劇という行為も一種の「治療的活動」になるという点を最後に指摘して、論を閉じている。

### 審査結果の要旨

これまで個々の謡曲の詞章の分析や原拠との関係を実証的に調査研究した論文は膨大な数にのぼるが、能と精神分析との関連を扱った研究は、金関猛『能と精神分析』（平凡社 1999年）や河合隼雄「能と深層心理学」（『能と狂言』創刊号 2003年）などわずかしか見当たらない。その意味で、「夢幻能を心理療法的観点から分析する」という本論文は、新鮮かつユニークな切り口を選んだといえる。

論者はまず夢幻能の基本構造を、次のように整理する。前場のシテは、男女いずれも心理的感情的問題を抱え、苦悩する姿をとってあらわれる。内心ではその問題を解決したいと願ってはいるが、周囲への警戒心も強く自らの過去は容易に明かさない。それに対しワキの旅僧は口数こそ少ないものの、的確な質問によってシテの自己開示を促すように仕向けていく。具体的には丁寧にシテの情報を聞き出し、思いやりをもって接することで、お互いの信頼関係を醸成するようにつとめる。シテは次第に警戒を解き、これまで第三者の話として語ってきた物語がじつは自身の過去であったことを認めるようになる。後場はワキの夢として語られることが多いが、その中でシテはついに自分を苦しめてきた過去の苦悩や罪について告白し、ワキに救いを求めるようになる。

こうした夢幻能の構造は、じつは問題を抱えたクライアントが、解決を求めて心理療法を受けに行く事象と、きわめて類似した性質をもつものではないか。サイコセラピストは、クライアントが自ら問題を開陳できるように、いくつかの問いを投げかけてはクライアントの情報を収集し、またダイレクトに解決策を指示するのではなく、もっぱら聴聞というスタイルによってクライアントとの間に「治療的ラポール」（相互信頼を醸成する場）を構築することを計る。安全で秘密が守られるという環境が整ってはじめて、クライアントは警戒を緩め、自己開示することができるようになる。こうした効果的な心理療法のプロセスと、夢幻能の展開とはきわめて類似した関係にあるのではな

いかというのが、本論文の主張のポイントである。

論者は第二・三章で女性のシテの謡曲を、第四章では男性のシテの謡曲を取り上げるが、その際にシテの人間的苦悩は、ただ神仏の奇跡によって鎮魂されたとは見なさず、心理療法的プロセスによって治癒されていく過程と説明する。当時の民衆が神仏の加護と感じていた精神的癒しの働きには、宗教意識の希薄な現代の観客にも通ずる普遍性が備わっていると論者は考えるからである。また能は「主役独演主義」といわれてきたが、じつはワキが重要な役割を担っていることを、心理療法におけるサイコセラピストの観点から説明しようとする。こうした指摘と論証は、ワキとシテの関係が、サイコセラピストとクライアントの関係に相当するという主張に一定の説得力と論理的整合性をもたせているといえるだろう。さらに第三章で同じ六条御息所をシテとしながら、『葵上』と『野宮』がじつは様々な違いを持つことを具体的に示した点も、論者の謡曲理解の確かさと広がりをお話している。

ただし本論文には、考慮すべき問題点も少なくない。団野委員は「主人公の成長や精神的解放をもたらすことや、観客へカタルシスを与えることも、演劇上の構造として能舞台以外にも考えられることである」と指摘する。たしかに夢幻能と心理療法との相似性の指摘自体は了解するとしても、それだけでは夢幻能固有の特徴を明らかにしたことにはならない。特にシテが治癒される場面を見て、観客もまた癒されるとする点に関し、勝田委員は「フロイトの論文の底にあるアリストテレスの浄化作用を持ち出すまでもなく、ほぼ全てのドラマ（シアターではなく）が大なり小なり備えている特質ともいえる。治療的効果の条件として、著者はそのドラマが上演された時代を意識しているようだが、時代というよりその観客が置かれている公私に渡る状況によるものとする方が適切であろう」と評している。第五章で論者が主張している「観劇の治療的効果」については、今後さらに考察を深める必要がある。

またフロイトを中心に、ワイルド、コールリッジ、フライターク、エリオット、プレヒトとさまざまな文献が引用されているが、それらが論文の傍証としてどの程度有効に働いているかについても、再考の余地があろう。以前にくらべ大幅に改善したとはい

え、いまだ論文の日本語は翻訳調で、表現に生硬さが残っている。

とはいえ、今回は研究途上ということで削除せざるをえなかったが、論者は神をシテとする『高砂』や『翁』『三輪』といった宗教性の濃い謡曲まで射程に収めた大胆な構想をもっている。ただでさえ晦渋なレトリックと思想性を帯びた夢幻能の象徴的世界に果敢に斬り込んでゆくその意欲的な姿勢と、能の心理療法的分析というオリジナルな問題意識を積極的に評価して、審査委員は本論文を課程博士（芸術文化学）の学位申請論文に値するものと認定する。